

社会学とは何か——その誤解と理解

圓 尾 哲 子

はじめに

社会学を学び始めた者が「社会学とは、一体何をする学問なのか」をあらためて考えてみると、とても説明し難い問題であることに気づく。

そこで、社会学の定義や、用いられる方法を調べ、同時に社会学がどのような学問であると思われるのかを考えることによって、社会学の輪郭を少しでも、自分なりに明らかにしようとした。

最初に「社会学」という名称について考えてみる。すると「社会」という言葉そのものが、わかりにくいものであることに気づく。「社会」という言葉は、とらえようによっては、

非常にあいまいな言葉である。広くは、人間の生活⁽¹⁾上の結合や共同を指すが、その内には、さまざまに細分された社会がある。

全体社会と部分社会という対概念であらわされるように、われわれが一般に「社会」という場合、その領域は、世界をひと区切りにまとめてしまうほど大きなものから、学校や会社などのすべての組織化された集団、階級などの非組織的な集団までを含んでいる。

加えて、われわれが経験的に知っている社会とは、世の中や世間を意味していることもあるのだ。

社会というものの存在があまりにも身近に感じられているがゆえに、それを学問の一分野の対象として、あらためて見

直すことが難しいということも、社会学が何であるかをわかりにくくしている。

1. 経験科学としての側面

学問の一形態としての社会学は、社会科学という「科学」に分類されている。ここでいわれる「科学」とは、実証主義的、経験主義的な方法によって問題を個別的に認識し、一般理論を構築するために仮説を検証する。これを、順を追って考えてみる。

人が社会生活をしていく上で、何らかの困難な状況に直面したとき、あるいは、従来からの理論では説明できないような事実の発生もしくは、相反する仮説が存在しているような場合、それを解決し、矛盾をなくすために新しい理論を組み立てる必要が生じる。これが、問題の発生である。

問題を定めたら、次は、新しい理論の出発点として、仮説を設定せねばならない。

仮説は、通常、独立変数と従属変数との関係を説明する命題である。

問題意識と仮説の着想とは、密接な関係がある。ともに、研究者が主体となり、能動的に行うことがらであるからだ。このとき、論理的に不整合な仮説が併存しようとしている場

合、それを問題としてとりあげること主観の介入する余地はないだろう。しかし、生活上の問題や、世間一般でいわれる問題については、それをとりあげるか否かを決定する段階で、必ず、研究者自身による選択が行われることを忘れてはならない。ただし、仮説の着想そのものに関しては、定まったルールは存在していないと言われている。

また、理論は、帰納的命題、演繹的命題の両方から得ることができるが、前者は、経験的に検証できるのに対して、後者は、仮説をたてることによって命題をつくりあげねばならない。しかし、仮説は、もっぱら演繹的に導き出されるのではなく、帰納的であっても、系統的に導き出されるのであれば、論理整合性を欠いているとはいえず、有効なものである。

精密化された仮説は、経験的検証を経ることによって、その真偽を証明される。検証を行うことが、仮説の科学的客観性を裏づけるのであり、その命題の妥当性を証明することになる。

仮説が真であるなら、それは一般化命題となり、新しい理論の成立を意味する。一方、仮説が偽とされた場合には、再度の検証が必要である。偽となった原因を探りあてねばならない。予測されるのは、仮説そのものに誤りがあった、検証

の段階に誤りがあった、あるいは、その両方に誤りがあったという三つの場合である。

仮説が誤っていることを発見したなら、新しい仮説、あるいは修正された仮説を検証すればよい。しかし、検証の誤りをいかにしてみつけたすかは、明確な方法が存在しないぶんだけ困難な作業であるだろう。また、一般的に、検証が実験によって行われることを考えると、広範囲な実験が可能な自然科学にくらべて、社会科学の実験は非常に限定的であるという事実も、検証を難しくしているかもしれない。

科学的探究方法を経て構築された新理論にも、別な意味では問題が残っている。

仮説を真とするには、検証において、何について、どれだけ正しければよいかという、質的、量的な基準が存在していない。検証そのものが、一般的、普遍的であるという論拠をもたない点である。

また、新しい理論が、きわめて限定的で特殊な理論である場合も、一般的で適用範囲が広い場合も、その正しさの程度には関係ない点も注意しておく必要がある。

真理の探究という面から考えるなら、より一般的な理論の構築が理想とされるのは当然であるが、現実の社会を説明するときは、理論の価値というものは柔軟性をもってとらえら

れるからだ。

2. 社会科学としての側面

科学は、自然科学と社会科学とに大きく分けられる。これは、自然現象と社会現象という、対象のちがいによるものである。

自然現象は、人間の意思や行為とはかかわりなく生じるものである。しかし、社会現象は、人間の意思や行為によって成り立っている。自然現象を認識する過程において人間の意思が入りこむ余地はないが、社会現象では対象を認識するのは人間であり、対象が人間の意思や行為によって成り立っているため、認識の客体と主体の関係が明確に独立しているとはいえない。

次に、社会科学内部での社会学の位置を調べてみる。

社会学は「個人と社会との関係」を説明することを主題とした学問であると定義されている。では、実際に個人と社会との間に生起するあらゆる現象のうちのどの部分が社会学の研究対象となっているのだろうか。

社会科学には、種々の学問分野が存在している。しかし、それらの各々が、明確に区切られた研究領域をもっているようにには見えない。しかし、明らかに社会諸科学は、それぞれ

別個の学問として成り立っているのだ。

社会科学が対象とする人間の行動は、さまざまな視点から分析される可能性をもっている。つまり、人間の行動のどの点を取りあげるかによって、どの学問が対象とするかが決まる。ここで述べているのは、人間の行動のひとつひとつが個別的にそれぞれの社会科学の学問対象となるということではない。ある行動が、それを見る角度を変えることによって、種々の社会科学の対象となり得るということで、社会学の眼鏡をかけると、その行動の、社会学の研究に意味をもつ部分を見ることができるようだ。

社会学は、社会学の視点から、社会学的なものの見方をすることによって、学問としての独自性を持っているのだといえよう。

ところで、社会科学のなかでの社会学は、後発学問としてたえず、自らの位置を確認し続けてきた。

社会学が、他の社会諸科学より遅れて成立した理由を推測してみよう。

社会科学のなかでも整った学問体系をもつ経済学は、社会学にくらべて、探究する主体と客体の区別が明確である。このことは、経済学の扱う現象が、数式としてあらわされていることと関係があるように思われる。つまり、経済学の方が

社会学に比べて、自然科学に近いのではないかということだ。前に述べたように、対象の認識において、自然科学の方がより明確な区別がなされている。このことから、社会学よりも自然科学的な要素を多くもつ経済学の方が、より早くから学問体系を整えていたのだと考えてみる。すると、社会学のどの部分が、より、自然科学から遠いのが明らかになってくる。

社会学は、経済学よりも、人間の意思が関与する度合が大さい。まして、関係について研究するのであるから、いっそう研究結果の予測は難しい。

現代のように、数的処理の発達した時代になると、自然科学や、数学によって、予測や分析をすることはやさしくなっている。しかし、人間の行為や意思決定の過程は、今なお数学的に解明されているわけではない。

経済学が主に扱うのは「財」であり、労働力や需要や価格などであり、数字であらわすことができる。そして、そのことを象徴する「貨幣」という、目に見えるものをもっている。法学においても同じようなことがいえる。法は規範であり、成文法に限らず、その効力は、権利の行使によって見ることが出来る。

社会学は「関係」を研究する学問である。これは、直接、

目に見えるわけではない。

社会学が、わかりにくい学問だといわれる原因のひとつが、体験しているにもかかわらず、見えない動きを対象としていることにあるのかもしれない。

3. 社会学者に対する誤解

社会学に対する印象の第一が「何をやるのか解らない不可解な学問」というものであるなら、当然そこには、無理解による誤解も生まれようというものである。

社会学は、社会現象をありのままにとらえることを出発点としている。しかし、社会学がみつけ出した現実が、世間一般で予想していたものと大きくかけはなれているということもあり得る。現実が、隠しておきたくなるようなものであっても、社会学者は、それを研究のパターンにあてはめ、一般的法則を見出そうとする。そして、そこにあらわれた結論もまた、世間が望むものではないかもしれない。

道徳的に正しいとされていることばかりが学問の研究対象になるわけではないことは、周知のことである。しかも、学問の成果が、道徳的に正しい人々によって用いられるとは限らない。

ところが、実際問題として、日本の国家公務員試験におい

て、社会学を選択すること、つまり社会学を学んだということとは、刑務所などでケース・ワーカーのような仕事に就くか、あるいは、農村などで地域のコミュニティーづくりに参与するか、公安調査に関する仕事に従事することによって社会秩序の安定をはかることなどを意味している。

学部学生や、世間一般の人々が、社会学に対して、人道主義的あるいは道徳的な考え方を要求しているにもかかわらず、企業の人事関係者は、利益を増すために労働者の配置を行うのであり、政府機関において社会秩序の維持のために働くことが、学生時代に考えていた、リベラリズムとは対極している場合が無いとは言いきれない。

社会学者に対する、幻想ともいえる人道主義の要求は、このような現実によって簡単に打ち破られるにもかかわらず、なお根強いものがある。

経験科学である社会学の手段を、社会学者がより厳密に用いることと、社会学者が誰のために、あるいは、どんな目的のために、社会学の研究を行うかは別問題である。それは社会学者個人の選択の範疇である。だからといって、社会学者が、誰の、どんな目的のために働いてもかまわないということにはならない。

社会学者の扱う対象が、社会現象にあらわれる個人と社会

との関係であり、日常的で体験可能なものである分だけ、社会学の用語や概念規定が、奇妙で、とっつきにくいものと思われていることも、社会学者がこの社会から、何か特別なことをみつけ出してくれるように思われる原因になっているのかもしれない。

これらの誤解は、社会学という学問に対する無理解から来るものである。しかし、社会学が、大学や研究所という象牙の塔に引きこもることなく、開かれた学問であるためにも社会学者の側から、広く世間一般に対して、社会学の目的や手段を、積極的にあらわし、理解を求めようとする姿勢をもつことが大切である。

4. 社会学に対する誤解

社会学者に対する誤解とともに、社会学の用いる手段が、誤解をまねく原因に加えられていることも、全く否定するわけにはいかないだろう。

例えば、社会調査は、主に、アンケートを含む統計として結果をあらわす。ところが、統計調査は、社会学だけが用いているわけではない。世論調査にも、商品テストにも、この方法は使われている。

統計的データをとることが社会学であるという印象は、明

らかに誤りである。社会学では統計的データを資料として研究を行いはするが、統計をとることそのものは手段でしかない。データを、社会学の視点から、社会学的に分析することが、社会学の研究である。

別な問題として、社会学を実践学と思い違いしている人が多いことも挙げられよう。社会学によって、社会に生起する不都合が解決され、暮らしやすい世の中になるだろうと一直線に考えることは、社会学を正しく認識していることにはならない。なぜなら、社会学者に対する人道主義的態度保持の期待と同様に、社会学を学ぶことや社会学の方法で研究することは、その結果を、何に対して用いるかということとは別な問題であるからだ。

社会学の成果は、世間一般で良しとされる結果をもたらすために得られるのではない。成果を、どのような企図のもとに利用するかを、社会学に求めることはできない。

むしろ、社会学からは、善悪の判断を払拭する必要がある。科学として、より厳密であることを願うならば、その学問的成果が、実際の社会生活に役立つか否かを判断する以前に、学問として正しいやり方を行っているかどうかを判断すべきである。

5. 価値自由について

社会学において、価値判断を排除することの必要性は、マックス・ウェーバーの価値自由という主張によって明確に述べられていることは、ひろく知られている。

ウェーバーは、科学の客観性の基礎を固めることとともに、科学から価値判断を排除して、科学を政治から分離せねばならないと主張した。科学と政治の論理的分離は、存在と当為、事実判断と価値判断、科学と道徳という根本的対立に基礎づけられている。

科学的研究を、実践的な立場から用いることには問題は無い。しかし、実践的立場に基づく主観的価値判断を、科学的研究に持ち込むことは、科学が本来もっている性質をゆがめることになる。

経験科学の目的は、存在 (Sein) を解明することではあっても、当為 (Sollen) を教えるものではない。いかにあるべきか、ということを探究することは、全く異なった場所で行われるべき議論である。

経験科学においては、経験的事実を確定するのみであり、手段が適当であるか、結果がどのようになるかを示すことができるだけである。目的や手段の善悪を議論することは、科

学が、客観的妥当性や厳密さを、自ら放棄することになりかねない。

実践的価値判断は、個人の主観によってはかられるべきものであり、科学的・客観的なよりどころを持っていないわけではない。

科学の目的は、現実的事象の因果関係の理論的究明である。⁽⁵⁾正しいか否かを決定するのは、科学者としてではなく「市民」の資格においてなしうるのみであり、この両者を混同することは、悪魔の所業であるとして、ウェーバーは述べた。

なぜ、徹底して実践的価値判断を排除せねばならないのか。人間は、すべて、価値基準をもって生きている。このことに關しては、社会学者も同様である。だが、社会学者として、社会学を研究するときに持つべき価値はひとつである。⁽⁶⁾

学問に対して、いかに忠実であるか、これが社会学者に認められる唯一の価値であり、科学としての厳密さの基本となるものであると、P・L・バーガーもその著作で述べている。

個人の価値を離れて、ものごとをありのままに見るために、社会学者は、自分がどのような価値をもっているのかを自覚している必要がある。自分が行う研究の、どの部分に自分の価値の傾向があらわれているかを把握することによって、より誠実に学問研究をすることができよう。

ウェーバーの主張する価値自由も、社会学者自身が価値を持つてはならないというのではない。社会学に実践的価値を求めることが経験科学としての社会学を限定することにつながるというっているのだ。実践における価値にこだわることによって、学問としての自由が失われることを畏れるのであり、学者自身の価値が、科学的探究のうえで、判断を誤らせるといっているのではない。

価値をもつ人間が、でき得る限り純粋に、対象を見るためには、価値判断のわくから自由になることが必要であり、そこから、科学としての自由も得られるということである。

価値をとりのぞいて研究した結果は、次の段階ではじめて、実践的な価値判断を下されることによって、政策などにも活用されることになる。

おわりに

かつて社会学に対してなされたさまざまな批判、社会学を百科全書の学問、レッテル科学、モザイク科学、侵略科学であるという主張も、今日の社会学の学問的独自性からは、正しい批判とはいえない。

さらに、連字符社会学と呼ばれている、社会現象の個別的な研究は、一般的な社会学の理論に対する、個別的、特殊の理

論の構築を目指していることのあらわれであり、社会学が独自の視点をもっていることの論拠とすることもできよう。

もうひとつ、社会学は、研究対象による区分とは別に、理論・計量・歴史・政策という研究方法による区分がなされている。

独自の概念・視点の確立に加えて、新たな学問的成果を得るためには、理論や計量についての研究の一般化、体系化が、大きな役割を占めるようになるのではないだろうか。

社会の発達によって、物質的な面から精神的な面へと、人間の関心が移動しつつある今日では、人間が社会に見出す不都合や不利益も、経済的なものから、人間関係に、その対象をかえつつある。

社会と人間との関係を説明し、説明や予測を行う、社会学の実践の機会が増える可能性は大きい。

社会学そのものが、派手に活用されることはなくても、社会学は、これまでに、さまざまな方法を蓄積してきている。それを、他の社会科学に応用することによって、社会科学全般が、より、幅広く奥行きのある研究をすることができるようになりはしないだろうか。

社会学は、社会現象の説明と予測という機能ゆえに、政策科学としての期待も寄せられている。そのためには、経験科

学としての探究方法の一層の発展と成熟が待たれる。

注

(1) 『社会学小辞典』有斐閣

(2) 今崎秀一編『現代の社会学』晃洋書房 一九七四年 二頁

(3) 同上

(4) 前出『社会学小辞典』

(5) 横山寧夫『増補・社会学史概説』慶應通信 昭和五十六年
八十二頁

(6) Berger, P. L., "Invitation to Sociology" 1963

水野節夫・村山研一訳『社会学への招待』思索社 一九七九年
十二頁

(7) 富永健一・塩原勉編『社会学原論』社会学セミナー第一卷
有斐閣 昭和五十年 十頁

参考文献

。『社会学小辞典』有斐閣

。今崎秀一編『現代の社会学』晃洋書房 一九七四年

。Inkeles, A., "What is Sociology?" 1964 辻村明訳

『社会学とは何か』(現代社会学入門) 至誠堂 昭和四十二年
。下田直春著『社会学的思考の基礎』増補改訂 新泉社 一九八
一年

。富永健一・塩原勉編『社会学原論』社会学セミナー第一卷 有
斐閣 昭和五十年

。横山寧夫『社会学史概説』増補 慶應通信 昭和五十六年

。Berger, P. L., "Invitation to Sociology" 1963

水野節夫・村山研一訳

。経済企画庁編『二〇〇〇年の日本』(二〇〇〇年の日本シリ
ーズ1) 大蔵省印刷局

。細谷昂、八木正編『現代への社会学的接近』アカデミア出版会
一九七七年

。姫岡勤編『社会学』改訂版 ミネルヴァ書房(ミネルヴァ全書
I) 昭和四十二年

。新睦人他著『社会学のあゆみ』有斐閣 一九七九年

(社会学科四回生・野村ゼミ)